

だから、どんな短いインタビューでも、コメントでも必ず手を入れます。そこに使われたちよつとした一言が「フック」になって、「ふうん、変わったことを言う人だな。ちょっとこの人の他のものも読んでみようかな……」というふうに思ってくれる読者がいるんじゃないかなと思ってそうしているんです。別に僕が思っているだけで、そんな読者はどこにもいないのかも知れませんが、それでも。

僕の場合は大学の教師という本業があって、物書きは副業です。副業として物書きをしていることの最大の利点は「生計のために妥協する」ということをしなくてよいということです。書きたいように書かせて頂く。「そんなものは読みたくない」と言われても、僕は気にしない。僕は「そんなもの」を読みたいという読者のために書いているわけですから。ですから、読者800万人の新聞に寄稿するときも、せいぜい数百、数千人の読者を想定して書いている。「そうそう」と膝を打ちながら読んでくれる読者というのは、それくらいしかいないと思っているからです。800万人が読んでくれて、誰からも文句が出ないようなものは、悪いけれど、読んだ瞬間に忘れられてしまうようなものです。何の「ひっかかりもない」からすると嘸下してくれる。たしかに人畜無害ではあるでしょうけれど、そんな書き物は後に何も残さない。僕はそんなものを書くために自分の時間を使いたくない。書くなら、「僕以外の人は書きそうもないこと」だけを選択的に書きたい。そうでなければ書く甲斐がない。そう思ってきました。

僕は僕であることで、これまで何とか食べてきた。人に言われる通りのことをして食べてきたわけじゃない。その経験則が僕に「僕以外の人間でも書きそうなこと」を「食べるため」に書くというほどリスクの高いことはないと教えています。

僕以外の人間でも書きそうなことを書かせたがる編集者たちには共通の特徴があります。「いばりたがる」ということです。書き手を下に見ようとする。そして、書き手を弱い立場に置くいちばん簡単な方法は「おまえのようなことを書く人間は他にいくらもいるのだ。おまえはいくらでも替えが効く人間なのだ」ということを思い知らせることです。

ですから、まことに逆説的なことですが、書き手に対して優位に立つことを願う編集者はライターに無意識的に「つまらないもの」、「誰でも書けそうなもの」を書かせようとするようになる。ほんとに。

神戸女学院大学は教員公募を落ちま

くった僕を拾ってくれた大恩ある大学ですし、20年にわたって僕は便々とその禄を食んできたわけですから、どんなことがあっても大学の看板に「傷をつける」わけにはゆかない。僕のせいで志願者が減るといようなことは絶対にあってはならない。それが在職中の唯一の制約でした。

具体的に言うと、上野千鶴子と高橋哲哉という二人のポストモダンの思想家を仮想敵にして文章を書いていたのですが、この二人は非常に攻略するのが難しい対象でした。

なぜならば、彼らの言っていることは、「正しい」からです。

「すべての差別や迫害をなくして、公正で平等で知的な社会を作っていこう」という彼らの主張と、**その目指すところの目標は100%正しい**のです。しかし、なぜか、「100%正しい世界」を構築していこうという人たちに僕は共感することができない。

言っていることは正しい。でも正しいことを言っている人間についていくことができない。どこか信用ができない。自分自身の中に彼らの正しさに共感できない、つよい身体的な違和感がある。この違和感はどこから由来するのか。それを言葉にするのが90年代を通じての僕の個人的な課題でありました。それは、周りの若い人たちが、彼らの圧倒的にロジカルに正しい言説に次々と屈服していったからです。屈服するのみならず、彼らから仕込んだ切れ味のいいストックフレーズを複製して、しゃべり方も、推論のしかたも、論拠とする事例まで、出来合いの型にはまっていった。

出来合いの型にはまって、出来合いの定型句を繰り返し、出来合いのロジックを機械的にあてはめて、現実を斬り捌いてゆく。それは本人にしてみたら、知的負荷も少ないし、爽快感や全能感をもたらす気分のいい経験かもしれません。でも、僕は直感的に「そういうのはよくないぜ」と思っていました。

個体識別できなくなるから。

切れ味のよすぎる思想的利器を使うことの最大のピットフォールはこれです。個体識別できなくなる。みんな同じような言葉づかい、同じような表情、同じような口調で話すようになる。「みんな同じことを言っている」ということが、あたかも「真理を語っている」ことの何よりの証拠であるかのように思われて、ますます相互模倣が進行する。

この本で言いたかったことを一言で言えば、「正しい」ということと「倫理的」であることは違うということです。

倫理の「倫」という字が意味するのは「同胞」、「とものがら」ということです。つまり、「**倫理**」**というのは、人間が集団として生きるための「理法」のこと**です。

集団として生きるための理法とは何か。「単一の原理に従って、全員が同じ顔つきで、同じ口調で、同じ言葉を話す」という状態が「倫理的」の定義であると僕は思いません。そんなはずがない。

全員か同一の「正しさ」で統制された個体識別できない集団は、そうでない集団よりも生き延びるチャンスが少ないからです。集団が生き延びるチャンスを減殺するようなものは、その定義自身によって「倫理的ではない」ということになります。それが僕の考え方です。

「アヴァター」 自分自身の変容態

軍隊には「督戦隊」というものがあります。前線での戦況が悪化したときに、前線から兵士たちが逃げ出してくることがある。そのときに、彼らを銃で脅して、前線に押し戻す仕事をすする人たちです。逃げ出したら後方の味方に殺されるという恐怖によって、兵士たちは前線にとどまり絶望的な突撃を繰り返す。前にも敵、後ろにも敵。どうせ死ぬなら、味方に殺されるよりは敵に殺される方が「まだまし」だ、と。

「レヴィナス序説」 訳者は内田樹

恐怖が限界を超えると、人間は恐怖を見ることを止めて、恐怖に基づいてものを見るようになる。これも人性の本質をよくとらえた言葉です。あまりに理不尽な状況に直面したとき、僕たちはその理不尽さにまっすぐ向き合っ「筋が通らない」と抗議し続けることにしだいに疲れて、どこかで「もう、どうでもいいや」と屈服してしまう。理不尽さを受け容れてしまう。そうすると、少なくとも「理不尽に抵抗することの重荷」からは解放されます。心理的にはずいぶん楽になります。体育会系のクラブや自己啓発セミナーやブラック企業の新人研修はこの人間の「弱さ」を熟知した人間が設計したものだと僕は思います。

どれほど理不尽な要求であっても、人間はそれを受け容れる方がそれを拒み続けるより「コストが低い」と判断すると、それに屈服する。追い詰められ、疲れ切り、手持ちの心身の資源が底をついてくるとそうなります。かたくなに筋の通ったことを言い続けて無駄に消耗するよりも、とりあえず「体力を温存する」方向に舵を切る。

「自己利益を最大化するために、そのつど適宜嘘をついたり、正直になったりすべし」ということが普遍的法則に設定されている社会では、そもそも「信用できる」という評価や「あの人は一言を重んじる」とかいう言明そのものが無意味だからです。「嘘をついたら『信用できない男だ』と思われて長い目で見たら損をするかもしれない」という推論自体が成り立たなくなる。

「嘘つき」という評価を避け、「正直である」という評価を得たいという功利的な計算は、「嘘をついてはならない」という普遍的法則が存在する場合にのみ成立するのです。

嘘とほんとうを巧みに使い分けることのできる「大人」は、「嘘をついてはならない」という戒律が磐石の土台を形成している社会でしか棲息することができないのです。

カントは行為の主観的原理を「格率 (Maxime)」と術語化しました。こうふるまうのが「オレ的には正しいと思う」という主観的原理です。「主観的」という以上、格率は個人的な性向や無知を含んでいますが、僕たちにはとりあえず行為の適否を判断するとき、それしか基準を持ちません。一人ずつが、それぞれ「オレの格率」を持っている。ですから、格率同士が衝突した場合、いずれに理があるかは、「オレの格率」たちが等権利的に併存しているレベルでは決しがたい。ということは、個別的な格率の理非は、その上位審級である普遍的法則に照らし

て吟味されなければならない。

===Web===

格率の用語解説 - 1 世間で広く認められている行為の基準。また、それを簡潔に表した言葉。格言。金言。処世訓。2 《〈ドイツ〉Maxime》カント哲学で、行為の普遍的な道徳法則に対して、主観的にのみ妥当する実践的原則（規則）。

=====

でも、その頃から、自分で勉強するのは「何がわからないのかがわかる」程度までにしておいて、あとはその道の先達に辞を低くしておさがりする、という研究方法がすでに身につけていたようです。それを「手抜き」と怒る人もいるかも知れません。でも、「聞いた方が話かはやいしという場合にはためらわず「教えてください」とおさがります。

学者の中には人にもものを訊くのを恥として、全部自分で勉強して、自分で調べるといふ意地っ張りの方がけっこういますけど、僕は違います。他の研究者のもっている知識というものは、僕にとってある種の「外部記憶装置」であって、書物と一緒になんです。本だとはじめから読まないといけなけれど、人間相手ですから「……って何のこと？」と訊けば、すぐに答えが返ってくる。そうやれば正確な知識が手に入るし、時間だって節約できる。

僕は子どもが生まれた年に助手として東京都立大学に採用されました。大学を出てからずっと定収入のない生活だったのが、31歳にしてようやく定職を得たわけです。ふつうの人より10年遅れでした。定職を得たのと娘が生まれたのが同時で、生活が一変しました。「社会人」として、「父親」としてという、それまでとはぜんぜん違う生活が始まったわけです。ばたばたと仕事と育児をしているうちに飛ぶように時は流れ、はっと気がつくと2年ほどが過ぎていました。中根さんからも「レヴィナスの訳はどうなっていますか」とぼちぼち督促が来る。しかたなく、押し入れから意味不明の訳稿を取り出して、ぱらりとめくってみました。なんと驚くべきことに、前には意味不明だった箇所があちこちで意味がわかるようになっている。

僕の翻訳は直訳ですけど、文法的には間違っていない。でも、20代の終わりではその日本語の意味するところがさっぱりわからなかった。それが、子どもが生まれて、定職につき、こつこつ働くようになってから読むと、ところどころ自分の訳文の意味がわかる。

翻訳というのは、必ずしも語の辞書的な意味がわかれば訳せるというものではないということがそのときに骨身にしみてわかりました。

自分か訳したのだけれど意味がわからなかった日本語の意味が2年経ったらわかるようになった。別にフランス語ができるようになったとか、哲学史的知識が増えたということではありません。育児をして、大学で仕事をし、非常勤講師としてフランス語を教え、そして何よりも合気道の稽古に熱中していました。

それでも、わからなかったことがわかるようになった。テキストというのは、「そういうもの」なのか……というつよい衝撃を受けました。

600万人の同胞が殺されたときにも、ついに神は来臨することがありませんでした。神による天的な介入はなく、奇蹟は起こらず、ユダヤ人は殺されるに任されました。ですから、ホロコーストを生き延びたヨーロッパのユダヤ人たちが信仰を持ちこたえることはきわめて困難なことでした。いったい、ホロコーストの後にどうやって神を信じたらよいのか。

現に、ヨーロッパのユダヤ人たちは次々と信仰を捨ててゆきました。ユダヤ教共同体そのものが、構成員の激減と、生き残ったものたちの背教によって滅亡の危機に瀕していました。レヴィナスはそこでなお神を信じるためにどうすればよいのかを考えました。1950年代以降、フランスのユダヤ人共同体で、レヴィナスはほとんど精神的な導師のような地位を占めることになるわけですが、それはレヴィナスが瓦解しかけたユダヤ人共同体に「それでもなお神を信じる」理路をあかあかと開示したからです。

神は地上で行われた不正をただすために介入しなかった。それでもなお神を信じ続けることは可能か？ この問いにレヴィナスはこんなふうに答えました。

「神に対して犯された過ちは神の赦しに属する。だが、人間が人間を傷つけたとき、それを赦すのは神の仕事ではない。」

哲学書は別に読者の知的・霊的な成長を望んでいるわけではありません。自分の本を読んで「わかる」読者だけを相手にしている。「わからない」という読者はパーティーには呼ばれていないのです。

人文科学、社会科学、自然科学という古典的な三分野の分類法があります。それぞれに「科学」という言葉が使われていますが、「科学」とは一体、何なのでしょう。今日はそれについて考えてみたいと思います。

・・・興味あるテーマだが、なるほどという説明は無かった。期待外れ。

「グローバル人材」とい

うのは、どう考えても、その識見の高さや、構想の壮大さで、国際世論から「注目される」人間のことでしょう。でも、文部省や経産省が考えている「グローバル人材」というのは、英語が話せて、タフなネゴシエーションができて、体力があって、安い賃金に耐えて、辞令一本で翌日には海外の支店や工場に飛んでゆける人間以上の何ものでもない。たしかにそういう人間は企業に収益をもたらすかもしれないけれど、世界に向けて発信すべきメッセージがあるわけではない。

戦勝国に対して、敗戦国は軍事的劣位にある。それはあたり前です。しかし、敗戦国民が持つ標準的なマインドは「次は負けない」です。

敗戦国がまずなすべきことは、「なぜ負けたのか」についての徹底的な精査です。国民全体が「次は負けない」と歯がみしながらでも本気で思っていたら、まず負けた理由について自省するところから戦後日本は始まったはずです。システムのどこに瑕疵があったのか、国際関係の状況判断のどこに狂いがあったのか、自国の戦争遂行能力についてどこで判断を誤ったのか、そういうことを精密に点検してゆくはずです。敗戦国民のいちばん自然な心情は「臥薪嘗胆・捲土重来」ですから。それがふつうなんです。

先日は医療系の学会で、危機管理の

コミュニケーションについて意見を求められました。パンデミックが起こった時に、パニックを起こさないためにはどうやってメディアをコントロールをするか、というたいへんに生々しい話がテーマでした。

どうやってマスメディアをシャットアウトするのがアウトブレイク時における緊急な課題であるという話が交わされました。マスメディアはただ騒ぎを大きくして、パニックを煽るだけで、医療活動に貢献するところがない、と。メディア関係者の方々は医療現場からここまで信用されていないことに少し職業的な痛みを感じてもいいんじゃないかと思いました。

エートス

===Web===

エートスとは。意味や解説、類語。《「エトス」とも》1 アリストテレス倫理学で、人間が行為の反復によって獲得する持続的な性格・習性。⇔パトス。2 一般に、ある社会集団・民族を支配する倫理的な心的態度。
=====

背馳（はいち）

===Web===

背馳の用語解説・[名]（スル）《背を向けて走り去る意から》行き違うこと。反対になること。背き離れること。
=====

ルサンチマン

怨恨、復讐を意味する語。特にニーチェは、強者の君主道徳と対比して、弱者の奴隷道徳は強者に対するルサンチマンによるものとした。彼によれば、元来道徳の根底には生命の根源からくる力強さがあるが、弱者は強者に対する反感をもち続け、一般の既成道徳を生じさせるとした。

=====

彼らが提言しているのは、相変わらずの「人参と鞭」戦略です。努力するものにはさらなる

報奨を約束し、努力しないものは一層厳しく処罰する。努力と成果が相関するシンプルなルールを学校教育に全面的に適用すれば、子どもたちは争って報償を求め、処罰を忌避して、どんどん勉強するようになるだろう、と。相変わらずそんなことを考えている。こういう思考しかできなくなっているというのは、大人たち自身が骨の髄まで市場原理に浸されていることの証拠なのです。「金が欲しくて人間は行動する」という以外の人間の動かし方を思いつかないのです。

「ロスジェネレーション論」というのは、階層格差は大学の卒業年次とそのときの景況によって決定されるという主張です。高度成長期やバブル期に大学を卒業した人たちは、就職でも苦労せず、順調に出世し、満額の退職金をもらって悠々と老後を送れるが、それより下の「失われた10年」に卒業した世代は職もなく、管理職へのキャリアパスも狭まり、終身雇用の当てもなく、年金支給も怪しい。今の日本は老人に手厚く、若者に冷たい格差社会である。それゆえ、無能で強欲の老人たちが抱え込んでいる個人資産を若者たちに分配すべきである、というのが「ロスジェネ論」の骨格でした。

これはこれで一つの考え方ではあると思います。ただ、「バブルのときにさんざんいい思いをした世代」というような書き方をされると、あの時代の日本人ほど醜悪なものを見たことがないのでバブル期が大嫌いという僕のような人間には、言っていることがよく理解できなくなります。いったいあんなことのどこが「いい思い」なのか。日本中の人間が株や不動産の売り買いに夢中になった時代のどこが羨ましいのか。